

# 『平家物語評判秘伝抄』

——作者周辺について——

阿 部 美 知 代

はじめに

—問題の所在—

『平家物語評判秘伝抄』(以下『平家評判』)は慶安三(一六五〇)年の刊記がある書である。<sup>1)</sup> 作者は未詳であり、流布本『平家物語』の本文を引いているとされる。<sup>2)</sup> 全体の内容を通して『孝経』『礼記』『論語』『黄帝内経素問』『東鑑』『三國志』『武経七書』からの引用がみられ、多彩な内容となっている。知識・教訓の書という位置にあるといえよう。

今井正之助氏は「『太平記秘伝理尽鈔』が登場して以来、類縁書・派生書を生み出しつつ、さまざまな形に変容し、消費しつくされた」と述べられているように、『平家評判』もその「『太平記秘伝理尽鈔』(以下『理尽鈔』)の影響を反映している作品、とみなされがちである。しかし『太平記』と『理尽鈔』のような理論上・理念上のつながりは、はたして『平家物語』と『平家評判』に於いてもありうるのだろうか。そこが無批判に看過されていること自体が、『平家評判』もしくは『平家物語』そのものの研究にとって支障となってしまうと思われる。

本稿ではその問題意識にたち、『平家評判』の作者周辺について考察するものである。

## — 作者周辺について

『平家評判』の作者については夙にその反駁書『平家物語評判瑕類』(正徳二年刊、以下『瑕類』)の凡例に(一部筆者により句読点を付した)、

評判の作者姓名未<sup>セイジイマダツマヒレカナナス</sup>レ 審 但世に憚り有て不<sup>レ</sup>記載。一部の書始<sup>シメ</sup>終<sup>ハシ</sup>、一人の著述にあら<sup>ズ</sup>。数人の作を会集<sup>ワイル</sup>して校考<sup>ガク</sup>、一人の手より出きと見えたり。議論不二<sup>ニ</sup>決<sup>ス</sup>事多し

と記されており、作者が数人であることを予想している。これは『平家物語』自体が複数作者の伝説を踏まえていることによるのかもしれない。ただ、この『瑕類』は本作と同時代の唯一の記事である。

本稿ではこの『瑕類』の予想に寄りかかってみたい。そのうちのひとりを探ること、もしくはその文化層を探ることが本作の研究上

の第一歩ではないかと考えるからである。

そこで注目すべき記事がある。それは巻四「三井寺炎上」の章段二十九丁・オ〜三十五丁・ウまで陰陽五行に基づいた中国医学の知識が挿入されていることである。

この章段は「頭中将重衡、薩摩守忠度の命によって三井寺が焼きはらわれ、仏を恐れぬ所業はいづれ平氏の身の上に災いとなるであろう」というものである。作者は治国安民をはかるための兵法について「第一明心」として独自の章段を設け、作者自らが物語の中に介入する方法をとっている。その内容は、あくまでも兵法語りでありながらも陰陽五行と仏教、中国医学である。その特徴とするところは、目・耳・鼻・舌・身体の各項目の解説をしていることである。左記にその一部を示す（以下の図1、図2は日本女子大学所蔵『平家物語評判秘伝抄』から転載）。

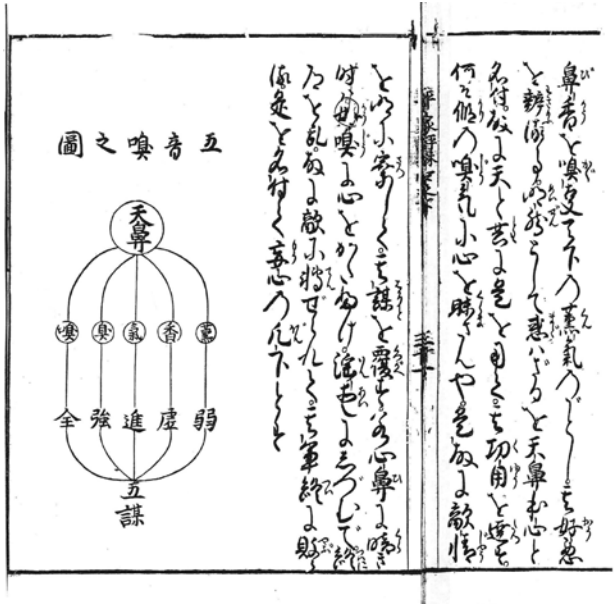
以上鼻、身体の図を例に載せた。作者はこれらの図を五官に分けて語っており、典拠となつていると考えられるのが、『黄帝内経素問』（以下『素問』）である。『素問』の理論基盤は陰陽五行説である。以下に『素問』「未病」と「五味」を例にとる。

「未病」

從陰陽則生、逆之則死。從之則治、逆之則乱。反順為逆、是謂内格。是故聖人不治已病治未病、不治已乱治未乱、此之謂也。

夫病已成而後藥之、乱已成而後治之、譬猶渴而穿井、闕而鑄錐、不亦晚乎。

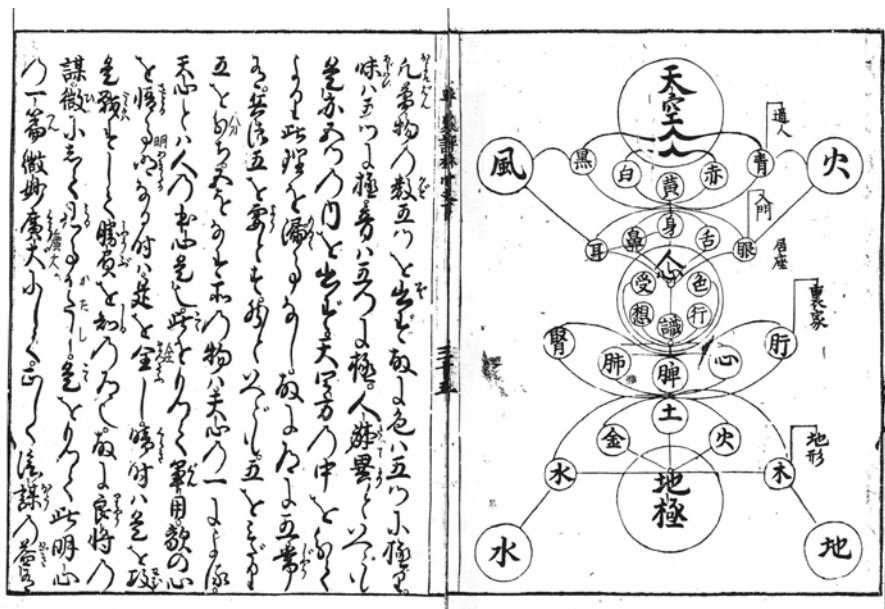
図1 巻四「三井寺炎上」三十一丁・オ〜ウ



「五味」

陰之所生、本在五味。陰之五官、傷在五味。是故味過於酸、肝氣以津、脾氣乃絕。味過於鹹、大骨氣勞、短肌、心氣抑。味過於甘、心氣喘滿、色黑、腎氣不衡。味過於苦、脾氣不濡、胃氣乃厚。味過於辛、筋脈沮弛、精神乃央。是故謹和五味、骨正筋柔、氣血以流、腠理以密。如是則骨氣以精。謹道如法、長有天

図2 卷四「三井寺炎上」三十五丁・オ～ウ



凡そ物入敷五つと出む取よ色は五つ小種を  
 味は五つ種房は五つは極人遊墨くつし  
 是かみつ入りと出むと天宮方の中と  
 一と此理を漏れゆりぬよんよ五常  
 る若は五と取くもゆくつし五と  
 五とゆらむをわとわ物入夫心一よ  
 天心一人の心是は此たりく靴用敷の心  
 と情明なる付是と全一情付ハ是と政  
 是預とく情友とわつてぬよ良将の  
 謀微小くくつては是と是とりつて此明心  
 の一篇做妙廣大少くつては謀入蒼皇

命。

「未病」とは早期発見・早期治療という医師の診断能力が根本にある。そして、「五味」は酸鹹甘苦辛が臟腑に与える悪影響と、それらの組み合わせ次第で臟腑に好結果をもたらすという陰陽の関係にあることを示している。つまり「未病」と「五味」は診断と原因・治療の重要性を説いている。『平家評判』作者がこの「未病」と「五味」を踏まえて次の記事（三十二丁・ウ～三十三丁・オ）を作成したと思われる（引用棒線筆者）。

舌に味を知事天下の五味のごとく食して、その命を養。凡そ五味は物に在て全舌にあらず。舌はもと虚也。故に物に応じてその味を分けて、好味に心惑さざるを本心天舌と名付。故に世と共に味を用て常に生命を養。所以に食する事節を違す。妄に穀を費す。故に国家に糧満て諸民安し。制せずして盜賊自生せず。いかんとなれば、盜賊は食の乏きより生るによつて也。故に敵終力を失て、戦事を得ず。はその味を知て下に施の故也。もし心舌に暗則必味に惑ひ、食、命を害と云事を知す。常に美物を好て二時の食を節にせず、晝夜口中に食絶ずといへども心中に飽事なふして飢人のごとし。終に是が為に病を生じて、身命を亡す。是を妄心の餓鬼とす。故に敵に転ぜられて、その軍終に敗らる。

盜賊・敵を病に、そして国家を身体に置き換えると意味が通じるように転じているのである。飲食の五味による身体への影響と損失

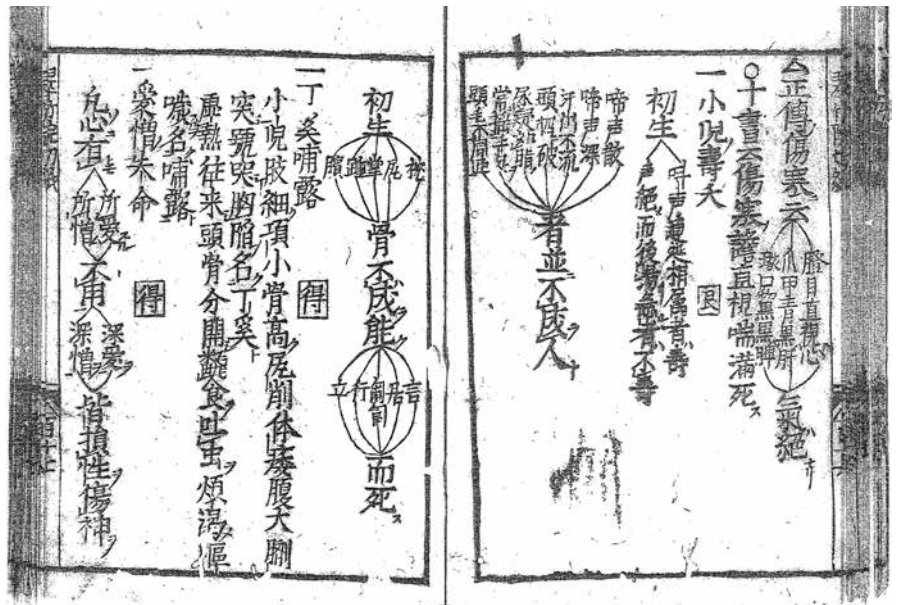
を語っているものであり、「未病」と治国安民を重ね合わせて『素問』を巧みに利用することが可能な人物が『平家評判』の作者のひとりであると判明する。ではその當為が可能になる人物とはどのような人物か。本稿では当時の医学界の状況を鑑み、曲直瀬流医学に着目したい。

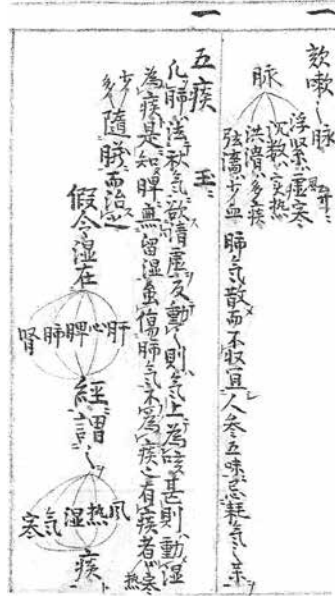
曲直瀬流の代表的な医学書は『啓迪集』（天正二年成立）『道三切紙』（天正一六年成立）『薬性能毒』（刊年不明）『弁証配剂医燈』『百腹図説』などである。曲直瀬家二代目玄朔は『医学天正記』（慶長二年刊）『延寿撮要』（慶長四年刊）『靈宝薬性能毒』（刊年不明）などを著している。一方『素問』は、劉温舒撰「素問入式運氣論奥」が慶長九年に、『黄帝内经素問註証發微』が慶長十三年に刊行されている。しかし、『平家評判』が記している五官の図は『素問』には見えない。また、作者独自のものでもない。その根拠としたころは、曲直瀬道三の『切紙』（図3）、『啓迪集』（図4）ではないだろうか。『切紙』とは、道三が道導練師（田代三喜）から口伝によって受け継いだ医学の奥義である。

福田安典氏は、曲直瀬道三が『切紙』を出版機構にのせて秘伝を公開するという画期的な出来事を述べておられる。その中国医学を集大成し、著した書が『啓迪集』全八巻である。服部敏良氏は『啓迪集』について、

本書は全八巻に及び、多くのシナ医書を引用して、まず類似の病症を一括し、その各論を説くに当って、名義・定義・原因・症状・脈法・類症・予後・療法等につき詳しく解説しており、当時医師の貴重な参考書であった…（以下略）…

図3 『増補切紙 地』 土佐山内家宝物資料館蔵





と述べておられる。<sup>7)</sup> この『啓迪集』に対応する部分として『平家評判』の「第一明心」で語られる三十丁・ウを例にとってみる（棒線筆者）。

①耳音を聴事天下の五音のごとし。譽、謗、愁、喜、怒の音聲に心を感ず。響に応じて耳心を用るを天耳本心と名付。故に能天下の言を聴。天下の訴を聞。三世の治乱をきく。  
いはんや敵国敵陣の中においてをや。故に②その音に乗じて敵をはかり、事を糺す。音とは是非管、非鼓、非鐘、無音をもつてこれを知る。調子天下に響てその虚實を顯す。故にきかざるところなし…（以下略）…

傍線部①に始まる部分は感情・感覚が臟腑に与える原因の好悪を

示す陰陽五行説である。そして棒線②の音は恐らく「器官」を示し、「鼓」「鐘」は「氣」と「血」の運行経路に関わる脈方に喩えているといえよう。それらの音に応じて診断し治療するという『啓迪集』の八項目のうちのいくつかを作者が利用したと考えられる。そして先に示した図1、図2は曲直瀬道三が著した『切紙』『啓迪集』のなかの図を踏まえていることに注目したい。則ち、『平家評判』作者のうち、ひとり曲直瀬の『啓迪集』に通じている人物だと想定できる。

福田氏は、曲直瀬道三が『啓迪集』の公開に踏み切ったことについて、「道三は意識的に医学の秘説を公開し、この書は後になかば医師の聖典となっていく」と述べ、旧来の伝承形式を公開することにより、曲直瀬流の医療技術を天下に示すことに繋がったと述べられている。<sup>6)</sup>そして『啓迪集』は慶安二年に刊行されるのである。しかも『切紙』も同時に刊行されている。

小曾戸洋氏は、

十六世紀には、国医書の出版はいまだ行われておらず、当初、『啓迪集』は曲直瀬家中で鈔写、伝承された。『啓迪集』が印刷物となり、世に広まったのは十七世紀半ば慶安二年（一六四九）のことであった

としている。<sup>8)</sup>今一度確認をする。『平家評判』は慶安三年に出版されており、『啓迪集』が一般の目に触れるようになったのが慶安二年である。この関係をどう捉えるべきであろうか。ひとつには出版されたばかりの『啓迪集』を何の関係もない編著者が目ざとく取り

入れたと考えることもできる。

二つめの可能性としては、巻四・三五丁の人体図からも窺えるように作者が『啓迪集』を自在に利用する能力のある曲直瀬流医師の習得者もしくは『啓迪院』出身者と考えるものである。次の第二章ではこの後者の観点に立つて検討してみることにする。

## 二 曲直瀬文化圏について

曲直瀬道三は後進の養成を目的とした学舎「啓迪院」を設立している。そこで学ばれる学問は、『切紙』、陰陽五行、『中国古典』『経典』『素問』『啓迪集』である。福田安典氏は、

曲直瀬道三は典葉の家の和氣や丹波の血筋ではない、つまり、在野から生まれた新しいタイプの医師であること、実力のみによって重んじられた医師である…(略)…その系列からは仮名草子「竹齋」作者富山道治や、『徒然草』の注釈を一般に公開するきっかけを作った寿命院秦宗巴(『犬枕』作者、浄瑠璃作者近松門左衛門の弟にして数多くの医学書の講釈と一般普及を果たした岡本一抱、他に岡本玄治、野間玄琢・三竹、山脇玄心、堀正意らの単に医学界にとどまらず、仮名草子や古典注釈にも名を轟かす人物たちが輩出された

と述べておられる。そして「彼らに影響を与えたのが曲直瀬道三・玄朔であった」と続けている。また、曲直瀬一門は出版による秘伝の公開だけでなく、『講釈』という方法で曲直瀬の名を裾野に至るまで知らしめたのである。その『講釈』は後に道三の多くの逸話と

して創出されていくことは福田氏が論じられているところである。同氏は『竹齋』のモデルを「玄朔という作者の師の行動をパロディとして演じる庸医として描かれた」としている。

藪医者・竹齋は腕の介(仮名草子「恨之介」をもじった名)とともに江戸に下る道中の見聞や失敗談に狂歌を交え、曲直瀬の診察方法である脈方や原因・治療法などを取り入れた作品である。福田氏は、「とにかく滑稽性を二の次にして竹齋を道三の講釈を受けた人物として描きかけたのである」と述べておられる。さらに同氏は『竹齋』の先行作『恨之介』について「医家・竹田家周辺から生まれたのではないか」という見通しをたてられ、『竹齋』はそれに対抗すべく貴人に供した作品ではなかったか」と推測しておられる。そして同氏は曲直瀬の講釈が『竹齋』の文体に「語り物」の芸能性を見た上で、謡曲「仲遠」についても「道三の『察病指南』講釈を取り入れてあるもの」と分析し、『竹齋』の姉妹作としての可能性を論じられている。<sup>13</sup>

以上、先行研究を中心に概観してみた。「啓迪集」の刊行年と『平家評判』の刊行年の連続性には何かしらの意図を認められる。『竹齋』が曲直瀬玄朔をモデルとし、謡曲「仲遠」は、道三の『察病指南』講釈を引用している。『平家評判』作者が念頭においた書は曲直瀬流が誇る『啓迪集』であったと考えるのが自然であろう。これらをあわせて考えたとき、近世初期の文芸において、曲直瀬文化圏の影響が大きかったことは考えられる。本稿では『平家評判』が『啓迪集』を利用したことを指摘するものである。

### 三 作者と曲直瀬流について

本作の作者が『瑕類』に於いて数人いたとする立場を支持し、曲直瀬の門下生から一人を想定した。そのうえで『平家評判』にもう一度戻ることにする。

作者が数多くの書籍を引用していることに目を転ずると、巻一「殿上閣討」の章段で『拾芥抄』の書名をあげている。また、巻九「小朝拝」では四方拝の記事をほぼ全文『拾芥抄』から引用している。これは講義による知識ではなく、明らかに作者の手に『拾芥抄』が置かれていたことがわかる。『拾芥抄』とは撰者、成立年ともに未詳であるが、室町時代には公家必携の書として重宝がられた有職故実書である。国会図書館蔵『拾芥抄』の書誌事項には、古活字版で無刊記、慶長年間の刊行と推察しており、編者は洞院公賢（藤原）である。『今大路家書目録』に『拾芥抄』の名が見え、六冊板本とあり、来歴は禁裡である。おそらくは国会図書館蔵の『拾芥抄』と同時期のものであろう。

また、作者が本文中に度々引用している『東鑑』は五二巻二五冊である（国会図書館書誌情報）。このような膨大な書籍を作者個人が所蔵していたのだろうか。

ここに福田氏が調査・紹介された『今大路家書目録』（以下『書目録』）がある。道三の後継者・玄朔は医学の功により、後陽成天皇から「今大路」の姓を賜っている。玄朔は徳川秀忠の治療にもあたり、「お伽の医師」の筆頭に位置づけられていた医家であった。<sup>6)</sup>

『書目録』とは、貴人の治療の謝礼として今大路家に集まった書や芸能者との交流によって献上された蔵書が記されている目録である。

『書目録』に記されている蔵書の数は四百四十八点にもほるといふ。その内訳は『日本紀』『古事記』歌書、和歌類、物語、連歌、謡曲、漢詩、説話、史書系図、軍記、有職故実等々の書である。意外なことに医学書は数えるほどしかなく、俗書の記載はない。それらの書には「禁裡より」などの来歴が記されていること、家の誉となるような稀覯本であることを福田氏が紹介されている。<sup>14)</sup>『平家評判』はこの『書目録』に記載されている以下の書籍を引用しているのである。

『拾芥抄』『日本紀』『弓書』『愚管抄』『保元物語』『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』『義経記』『東鑑』『太平記』『甲陽軍鑑』『論語抄』『通俗三國志』『三略抄』

福田氏は「書籍が集まりやすいお伽の医家の蔵書は、貴人の私設図書館」とし、「コネクションによる貸し出しが可能であった」としている。逆にコネクションがない場合はどうか。素朴な疑問として『平家評判』作者はどのようにしてこれらを手にとることができたのか。これらの書籍を作者が目にしたこと、『啓迪集』を利用していることを付き合わせて見れば、作者は今大路家に入入りしていたとする方が自然であろう。

また、『書目録』の中で『平家物語』の横に『同評判』板本二二冊の記載がある。これは『平家評判』二二冊（欠本二冊）以外には考えられない。その来歴は「禁裡」からである。

抑も誰が禁裡に献上したのか、またその時期、板本であること、今大路家ゆかりの『竹斎』が記されていない中で、その書が今大路

家の誉となる家宝のリストに載せてあること等、考えるべき事は多く、今後も調査・検討する必要がある。ただ、今大路家の蔵書に『平家評判』の記載があったことだけを指摘しておく。

結論として『平家評判』作者は曲直瀬流の学問を修めた人物、そして今大路家の影しい書籍の利用が可能であった人物と捉える方が説得力があるのではないだろうか。それらの蔵書群は、医師たちが語り物としての軍記物語を生み出しやすい絶好の環境であったことを示していると考えられる。そして何よりも、富山道治が今大路家に入入りし、そこで目にした観世や金春などの芸能者との交流から『竹齋』という文芸作品を創出したことなどが関連づけられよう。則ち、『平家評判』を『竹齋』周辺の作品と位置づけるものである。

### おわりに

我々は『平家評判』の時代を問はず時期がきているように感じない。この作品を『平家物語』の享受史の中におくことは間違いない。しかし、中世の軍記物語とは一線を画し、仮名草子として捉え直す必要がある。また『理尽鈔』との関係も一線を画す必要がある。例えば、巻一「吾身栄花」にある多田家伝なる秘伝を作者が受け継いだという語りを、『瑕類』においては真つ向から「寓言なり」と凡例で批判をしている。本作品には鬼一と義経の問答、『平家物語』に本来登場しない藤原秀衡、北条高時など、『太平記』や『義経記』が混在している。更に『東鑑』から頼朝譚（巻十一）「逆櫓」その他にも散見）を加筆するという『平家物語』本文から遙かに逸脱してしまっているのである。つまり『平家評判』は『平家物語』に名を借りた啓蒙書・儒教的教訓など雑多な知識を多分に含む仮名

草子といえるのではないか。その象徴として、史実とはかけ離れた極悪人・平清盛像（「吾身栄花」）、宗盛の戯画化（「能登殿最期」）、そして維盛生存説話（巻十）などがあげられよう。『平家評判』という作品の不思議さ・不可解さへの答がそこに見出されるのである。翻って『平家評判』が登場したことにより初めて『平家物語』が古典となったといえる。近世出来の「読み物」として正しく評価されるべきである。引き続き今後の課題としたい。

注(1) 日本女子大学所蔵『平家物語評判秘伝抄』は上下大本十二冊二十四

巻外題『平家物語評判秘伝鈔』表紙右上に羽前大泉田川郡西小野方村渡邊治左工門の張り紙あり。内題・目録『平家物語評判秘伝抄』、柱「平家評判」、奥付刊記田中庄兵衛・梅村彌右衛門開版、

(2) 『日本古典文学大辞典』（岩波書店一九三四）による。

(3) 今井正之助氏『太平記秘伝理尽鈔』研究（汲古書院二〇一二・二二二）

(4) 『平家物語評判瑕類』正徳二刊、五卷五冊、版本が国会図書館、宮内庁書陵部、学習院大学、京都大学、駒沢大学沼沢文庫、東大、東北大学狩野文庫、旧彰考館で所蔵されている。

(5) 『現代語訳 黄帝内経素問上・中・下』（東洋学術出版社）

(6) 福田安典氏「秘伝の公開としての講釈―医師の講釈と『徒然草』註釈―」（『伝承文学研究』（四五）一九九六・〇四）

(7) 服部敏良氏『室町安土桃山時代医学史の研究』（吉川弘文館二〇〇七・六一）

(8) 小曾戸洋氏『啓迪集』の書誌研究―目筆もしくはそれに類する伝本の研究―（二松学舎二十一世紀COEプログラム日本漢文学研究の世界の拠点の構築『研究成果報告書 曲直瀬道三』―古医書の寛文を読む



一 二〇〇九・三所収)

(9) 前掲書福田安典氏「曲直瀬道三説話について」(二)松学舎二十一世紀COEプログラム日本漢文学研究の世界的拠点の構築)

(10) 『假名草子集』(日本古典文学大系 岩波書店1965・5所収)『竹斎』

(11) 福田安典氏「『竹斎』—モデル論への試み—」(『語文』(大阪大学)五九、一九九二・一〇)

(12) 福田安典氏「『恨みの介』作者考」(『国語国文』六二、一九九三・十一)

(13) 福田安典氏「謡曲『仲遠』について—『竹斎』姉妹作の可能性を求めて」(『日本文学史論 島津忠夫先生古希記念論集』世界思想社一九七九・九・一八)所収

(14) 福田安典氏「武田科学振興財団杏雨書屋蔵『今大路家書目録』について」(『芸能史研究』一二九、一九九五・四)

### 受贈雑誌(九)

平安朝文学研究

早稲田大学平安朝文学研究会

別府大学国語国文学

別府大学国語国文学会

法政文芸

法政大学国文学会

前橋文学館研究紀要

萩原朝太郎記念・水と緑と詩のまち

待兼山論叢

大阪大学大学院文学研究科

三重大学日本語学文学

三重大学人文学部日本語日本文学研究室

三田国文

慶應義塾大学三田国文の会

武庫川国文

武庫川女子大学国文学会

武庫川女子大学言語文化研究所

武庫川女子大学言語文化研究所

年報

山辺道

天理大学

横浜国大国語研究

横浜国立大学国語国文学会

横光利一研究

横光利一文学会

米澤國語國文

山形県立米沢女子短期大学国語国文学会

立教大学日本文学

立教大学日本文学会

立正大学國語國文

立正大学國語国文学会

立正大学大学院日本語・日本文学研究

立正大学大学院国文学専攻院生

学研究

会